

$1.0 \times 10^5 \text{ Pa}$ の下で、ある物質の沸点は 400 K であり、沸点付近で温度が 1 K 上昇することにより蒸気圧は $1.5 \times 10^3 \text{ Pa}$ だけ増加する。 400 K におけるこの物質の蒸発エンタルピー ΔH はおよそいくらか。

ただし、クラウジウス・クラペイロンの式によると、

$$\frac{dp}{dT} = \frac{\Delta H}{T(\bar{V}_g - \bar{V}_l)}$$

p : 蒸気圧
T : 絶対温度
\bar{V}_g : 気体時のモル体積
\bar{V}_l : 液体時のモル体積

が成り立つ。ここで、 $\bar{V}_g \gg \bar{V}_l$ なので $\bar{V}_g - \bar{V}_l \doteq \bar{V}_g$ であり、気体は理想気体とみなせるものとし、気体定数 $R = 8.3 \text{ J K}^{-1} \text{ mol}^{-1}$ とする。

1. $4.2 \times 10^3 \text{ J mol}^{-1}$
2. $9.8 \times 10^3 \text{ J mol}^{-1}$
3. $2.0 \times 10^4 \text{ J mol}^{-1}$
4. $5.6 \times 10^4 \text{ J mol}^{-1}$
5. $1.2 \times 10^5 \text{ J mol}^{-1}$

原子吸光光度法，誘導結合プラズマ（ICP）発光分光分析法及びICP質量分析法に関する次の記述のうち，正しいのはどれか。

1. 原子吸光光度法では，主に励起状態の原子蒸気による光吸収を観測している。
2. 原子吸光は極めて狭い波長範囲（1 nm 程度）の光吸収であるため，共存物質等による干渉を考慮する必要がない。
3. ICP は，光と熱の発生を伴う状態で，通常は物質と酸素との化学反応によって生じる。
4. ICP 発光分光分析法は，測定対象の元素ごとにプラズマ化して励起源として用いる必要があるため，多元素同時測定には適用できない。
5. ICP 質量分析法では，ICP 中に導入された試料のうち，イオン化された原子を質量分析計で検出している。